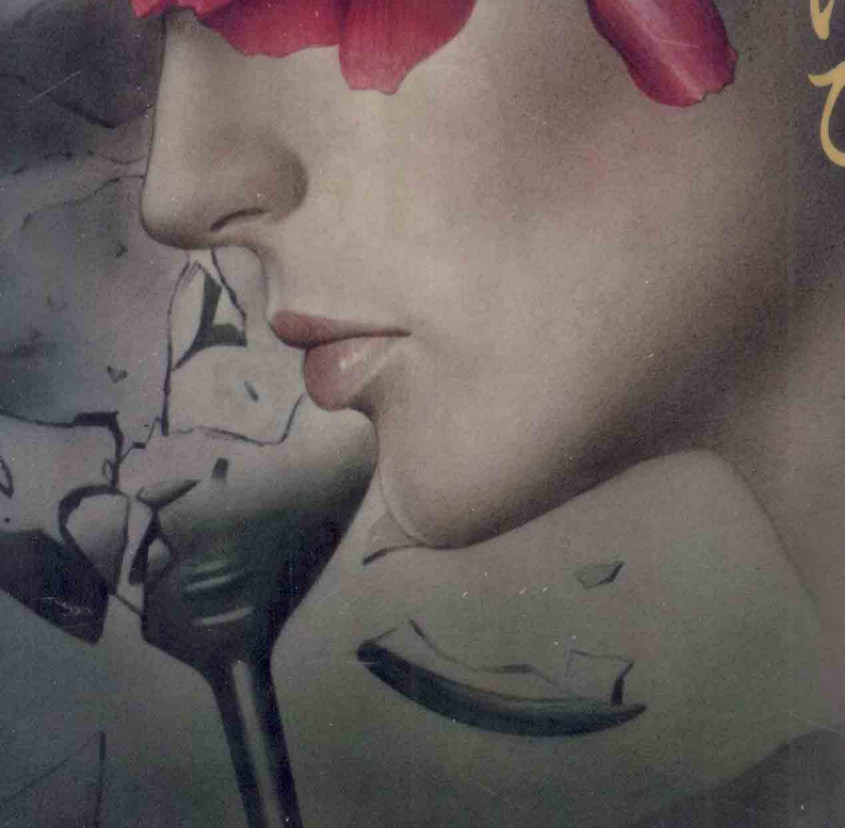


花嫁のさげび
泡坂妻夫





花嫁のさけび

定価 九八〇円

第1刷発行 昭和55年1月17日

第2刷発行 昭和55年2月18日

著者 泡坂妻夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

© TSUMAO AWASAKA 1980 Printed in Japan

0093-306591-2253 (0)

(文2)

花嫁のさけび 目次

一章	花嫁の輝き	5
二章	亡妻の恋歌	46
三章	花嫁の毒杯	122
四章	亡妻の饗宴	184
五章	花嫁の叫び	230
終章		286

装
幀
野
中
昇

花嫁のさけび

一章 花嫁の輝き

Ⅰ

伊津子はただ早馬はやまの顔だけを見詰めていた。

若苗色の奥深い眸ひとみだった。照明の中に浮き上った顔は、礼拝堂の荘重なたたずまいにふさわしかった。伊津子は相手の肩までしか背がない。顔を上げたままの姿勢を続けているうち、涙がたまってくることが判る。

早馬は紺のダブルのスーツに縞のネクタイ。伊津子は白っぽいアフタヌンドレスだった。胸につけた銀のブローチが、どこかの光を反射して、さっきから相手の肩のあたりに、小さな星を遊ばせていた。星は二人の静かな息を伝えて、小さきみに震えた。

牧師は立卓の前で何か言った。耳を傾けてみたが、同じだった。

「何と言っているの？」

と、伊津子が小さく訊いた。相手の黒く長い眉が軽く動いた。早馬は黙って腕を背に廻して、伊津子を聖壇に向けた。

その瞬間、立て続けにカメラのシャッターの音が響いた。参列者の席からだった。牧師は眼鏡の奥から、音のする方をうかがったようだが、すぐ聖書に目を戻した。牧師はメタルフレームの眼鏡を掛けた、若い男だ。

牧師の絶え間ない言葉が流れる。抑揚の美しい外国の言葉は、快い音楽を聞いているのと同じだった。

「何と、言っているの？」

伊津子は軽く頭を下げたまま、唇だけを動かした。

しばらくすると、牧師の声に混って、小さな声が聞えてきた。

「……二人の新しい門出が、神によって認められ、二人の上に神の恵みの限りなくそそぎ——」

教会の中は寒かった。小ぢんまりとした礼拝堂だったが、それでもこの結婚式のためには広すぎた。礼拝堂にいるのは、伊津子と早馬と牧師、参列者席にいる黒木、全部合わせても四人だった。

牧師は祈禱を終えると、改めて早馬の方を向いた。言葉はあまり長くなかった。牧師は最後に、言葉尻を高くはね上げて答えを待った。

早馬は牧師の目を見、大きく息を吸った。

「ちょっと待った」

唐突な声が聞えた。伊津子はびくっとして参列者席の方を見た。

席の間にある中央の通路に、黒木が立ちはだかっていた。黒木は片手を上げ、片手でカメラを早馬に向けた。もう一台の長い望遠レンズをつけたカメラが首から下っていた。

「早馬さん。済みませんが、もう少しこちを向いてください」

牧師は訝しそりに黒木を見下ろした。だが、早馬は態度を崩さなかった。改めて呼吸を整えると、はっきりとした声で、

「誓います」

と、誓約した。

牧師は伊津子の方に向いた。胸がどきどきしていた。シャッターの連続音が聞えた。

牧師は早馬のときと同じように、声の音階を上げて言葉を切った。伊津子は静かに息を吸った。

「誓います」

牧師の反応は同じだった。牧師は儀礼的にうなずくと、祭壇から指輪のケースを取り上げた。早馬は伊津子の手を取った。細い薬指に指輪が光った。

牧師は二人の手を組ませ、その上に自分の手を重ねた。早馬の手は暖かだった。再び流暢な言葉が流れ始めたが、声は耳の傍を通り過ぎるだけだった。誓約を終えた早馬の目に、安らぎが漂っていた。

最後の祈禱で、式が終った。

牧師は初めて二人にこやかな顔を見せ、親しみのこもった口調で何か言った。

「おめでとうございます、と言っている」

と、早馬が言った。

聖壇を背にして中央の通路に出るとき、スズランの花束を落しそうにした。早馬が左側に廻ったからだ。伊津子はそのまま、身体の向きだけを変えるつもりでいた。

早馬は花束に手を添え、両脚がきちんと揃うのを見てから、左腕を取った。

通路の向う側に、黒木がまだカメラを構えていた。

「ちょっとそこで立ち止って下さい」

カメラの向うに、黒いひげをもじやもじやに生やした顔が見えた。

早馬は構わずに歩き続けようとしたが、伊津子は腕に力を入れた。早馬は逆らわなかった。

黒木は手早くシャッターを押し続けると、

「有難う、花嫁さん」

と、教会を飛び出して行った。

早馬は何か言おうとしたが、思いなおしたように口を閉じた。そして、どうにも仕方がない、と言う風に、唇へ笑いを泛べた。

「以前、これと同じ場面を撮ったことがあったよ。その映画では、ラストシーンだった。だが僕たちは、これからが始まりだ」

「覚えてるわ」

と、伊津子が言った。

「〈旋回〉ね。ラグビーの選手の映画で、相手の女優さんは……」

それで、バージンロードは終わりだった。

教会を出ると、白い空が拡っていた。太陽は見えなかったが、暗い礼拝堂に馴らされた目には、外の光は眩しかった。

「淋しくはなかったかい？」

と、早馬が訊いた。

「本当は、普通の式にしたかった。披露宴には君の友達も多勢招待して——でも……」

「いいんです。わたし、少しも淋しくなんかありませんでした」

と、伊津子は答えた。

「そう、式の間中、君の顔が輝いていたね。それを見て、僕は安心したんだ」

「わたし、本当に今幸せなのよ。これ以上、何もいらぬの。早馬さんだけがいればいいの」

伊津子は教会を振り返った。幾何学的な三角の屋根。灰色の壁に飾りのない小さな窓。古い質素な

教会だった。教会の後には青い小麦畑が遠く続いている。

教会の前庭に大きなイチョウが聳えていた。みずみずしい緑の間に、ツグミの飛び交うのが見える。庭に立つと湿った土の匂いがした。

「済みません、こちらを向いて下さい」

黒木が地面に片膝をついて、カメラを向けていた。思わず身体を正そうとすると、黒木はカメラの陰からひげの顔を現わした。

「いや、自然に——さっきみたいに、もっと寄り添って」

とても自然に、とはいかなかった。笑おうとすると、頬がこわばってしまった。

黒木は更にシャッターを押した。最後の一枚を巻き上げると、長い髪を掻き上げた。

「あと、ホテルで少し撮らせてもらいます。それでお終いにします」

黒木は手早くフィルムを巻き取りながら、紋切形に、

「この度は、おめでとうございます」

と言った。

「ホテルでも撮るのかい」

早馬は迷惑そうだった。

「いいじゃありませんか。たまたま僕がいたから、立会人になることが出来たんでしょう」

「ひどい立会人だった。牧師さんが嫌な顔をしていた」

黒木は自分の服装を見渡した。黒木はよれよれのサファリジャケットを着ていた。

「ネクタイぐらゐ締めなさいけませんでしたか？」

「服装はどうでもいい。君はバージンロードの上に立っていた」

「はあ、白い布が敷いてあった中央の通路ね。でも、踏んじゃいませんでしたよ」

「それに、僕たちより先に教会を出てしまった」

「あれでもうお終いかと思いましたが。退場するにも、そんな順序があったんですか。なるほど早馬さんは精しいですね。早馬さんのクリスマスチャンネームは何といいますか？」

黒木はカメラを鞆に収め、代りに手帖を引き出して、鉛筆を構えた。

「ジャン」

と、早馬が言った。

「なるほど、ジャンヌという愛称はそこからきたんですね。ところで、結婚の御感想を聞きたいんですが——」

黒木は伊津子の方を向いた。

「松原さん……じゃなかった。失礼——伊津子さん。北岡伊津子さん……こう呼ばれる今のお気持は？」

伊津子は花束をゆっくりと廻した。

「とても……口では言えないほど、幸せです」

「全国のジャンヌファンは、きつとあなたを羨ましく思い、同時に残念がるだろうな」

「これからが大変だと思えます」

「でも、その覚悟は、とっくに出来ているでしょう。僕はそう思った。伊津子さんは、式の最中でも、僕のカメラを意識してくれましたね。偉いもんですよ。もう、あのときにはちゃんと北岡早馬夫人になっていました。あなたなら大丈夫。僕が保証する」

「君に保証されても、どうなるものか」

早馬は苦笑いした。

「写真、出来たら送りますよ。それにしても、オルリー空港で出会ったのは、チャンスだったね。誰

にも気付かれずに成田を発ったんでしょ。マナージャーの滝さん、すこぶる惚けるの、うまいものね」

「僕は困った人に見付かったと思ったんだ。こんなことになる、当てこすりを言ってくる週刊誌がいるんだ」

「嫌味ぐらいは聞いておやりなさいよ。けれども、滝さんの方は、相当油を搾り取り取られるでしょ。相変わらず、早馬さんは週刊誌を儲けさせていないんでしょ。昔から浮いた噂もなかったし、喧嘩もしていない。なぜ東京で式を挙げなかつたんですか。それほど、まだ先の奥さんにこだわりがあるんですか？」

「おい！」

早馬は短く叱った。黒木はちらりと伊津子を見た。

「こりゃ失礼。口が滑りました。さあ、ホテルに送りましょう。フランドルはまだ寒いや。東京ならもうストーブもいりませんね」

黒木は先に立って、車の方に歩いて行った。車はクリーム色の丸っこいシトロエンだった。黒木は先に自分の持ち物を前の座席へ投げ込んでから、後のドアを開いた。

伊津子が車に入ると、隣に早馬が坐った。

黒木はすぐエンジン掛けた。

「早馬さん。よく休暇が取れましたね。撮影中じゃなかったんですか」

黒木は大きな声で言った。

「僕だって、一年中仕事に追い掛けられているわけじゃない」

と、早馬が言った。

「ちょうど今度の映画の撮影がクランクアップしたところだね。まだ少しアフレコと撮り直しが残っ

ているんだけれど、それまで身体が空いたんだ」

「じゃ、これから二人だけでゆっくり見物が出来ますね。奥さんはこちらの方へは？」

「初めてです」

と、伊津子は答えた。

「それなら見る所は沢山あります。ヴェルサイユ、ルーヴル、それともシャンゼリゼー？」

「いや、ブローニュに寄ってみようと思っっているところだ」

「いいですね。新婚のお二人に持って来いの舞台です。すっかり歩くには一週間かかります」

「そうすれば申し分ないんだが、明後日には東京へ戻らなければならぬ」

「それじゃ、矢張り仕事に追い掛けられているんじゃないやありませんか。奥さん、短い休暇ですよ。うんと甘えなさい」

車はなだらかな斜面を登っていた。道の両傍に、糸杉が飛び飛びに過ぎ去った。

「でも早馬さん、よくこんなロスタンの片田舎の教会を知っていましたね。ロケにでも来たことがあるんですか？」

「——いや、そうじゃない」

早馬はちよつと間を置いてから言った。

「教会は大輪田山遊さんゆうが教えてくれた」

「へへえ、早馬さんのところに食客と洒落こんでいる、早馬さんのスタントマンだった、あの山遊が？ 山遊は今でも居候いせうこうなんでしょう」

「そう。山遊は三年ばかり、ヨーロッパにいたことがあるんだ」

「ははあ、スタントマンの修業のためですか？」

「いや、山遊は特別なスタントマンとしての修業をしたわけじゃない。彼の目的はフラメンコ舞踊の

研究だった」

「フラメンコ舞踊？」

「そう、山遊はスタントマンになる前に、ダンシングマスターの資格を得ている」

「そりゃ、初耳です」

「わたしも初めて聞くわ」

と、伊津子が言った。

「そんな人が、早馬さんの家に住んでいるなんて、全然知りませんでした」

「そう、まだ君に話していなかったね。君と逢うときは、いつも忙しすぎた。大輪田山遊、本当はへやまゆき」と読むらしい。山歩きの好きな父親の命名だと聞いたことがあるが、皆はへさんゆうと呼んでいる。その父親に似て、山遊は小さいときからスポーツの万能選手だった。けれども、多くの人がそうだったように、途中で山遊の進む道が変わった。山遊は自然にそうなったと言っているが、大学の頃から、舞踊に生命を燃やすようになったわけじゃない、そんな記事を読んだことがありますよ」

と、黒木が言った。

「早馬さんの初志は何になることでした？」

「……矢張り、絵を描くことだった」

「なるほど、お父さんの血が伝わっているんでしょね。そう言えば、早馬さんはお父さんの個展を見に来た映画監督の藤堂さんにスカウトされたんでしたね」

「山遊の場合は全部自力だった。何度かコンクールに優勝してから、ヨーロッパに渡ったんだ。もっとも本気で勉強したのは最初の一年だけ。あとは料理店を渡り歩いて、皿洗いなどしながら、ぶらぶら遊んで過したらしい」

「今の僕と大体同じですな。その山遊が、どうして踊りを止めて、映画のスタントマンになどなったんですか？」

「訊いてもその理由は言わない。今じゃ、ダンスをする玩具の人形を見ても、嫌な気分になるそうだし、そうですかねえ。余程ショックなことでもあったんでしょか？」

「スタントマンになったのは、僕に体型が似ていて、スポーツに自信のあるスタントマンを帝映が募集したとき、応募してきたんだ。僕もその面接に立ち会ったんだが、なかなか魅力のある男だった。採用が決まると、僕たちはすぐ仲良しになった」

「その後はよく知っています。山遊は早馬さんの吹き替えになって、実にさまざまな危険に挑戦しましたね。絶壁から落っこちる。断崖から海に飛び込む。高層ビルから墜落する。ジェットコースターから飛び降りる。終いには、落っこちの山遊」という名さえ付けられた。それが、最後につまらぬことで骨折した。あれは、馬から落っこちたんでしたね」

「そう。ちょっとした油断があったんだ。その怪我は致命的だった。今でも歩くとき軽く足を引きずっている」

「その後、山遊は早馬さんの家で、何をしていますか？」

「映画のシナリオを書いている。この頃では、テレビからも注文が来るようになったよ」

「こりゃ、また意外な変身ですね」

「君は知らなかったかね。帝映でシナリオを公募したとき、山遊が応募したシナリオが一位に入選したんだ」

「それなら知っていますよ。題名が確か、〈花嫁の叫び〉でした。去年の六月でした」

「その作者が大輪田山遊なんだ」

「そうでしたか。作者まで注意しませんでした」